

# RA の報告 IV

小谷英生（社会学研究科博士後期課程）

---

## 1 報告の目的と概要

本報告書は 2009 年度開講された講義＝演習連結型授業「社会思想史」における RA 体験の報告であり、本プロジェクトの成果ならびに改善案と、実際面での経験の蓄積を意図し、本プロジェクトをいっそう良い方向へと推進することを目的としている。

結論からいえば、本プロジェクトはまさに現在大学教育に求められている授業形態であり、今後このタイプの講義が幅広く行われるべきだと考えられる。

## 2 具体的な活動報告

報告者は今年度はじめて RA として講義に参加した。担当した生徒は A 君（ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』）、B 君（ヘーゲル『法の哲学』）、C 君（ホッブズ『リヴァイアサン』）の 3 人であった。全員社会学部 3 年生であり、また思想史を専門としない学生たちであった。

今回、講義にのぞむにあたり、報告者は毎週の勉強会を視野にいたしたサポートから、たんなるレポート執筆のフォローまで、学生のやる気に合わせてさまざまなサポートプランを考えていた。しかしふたを開けてみれば、3 人とも「年末まで忙しい」とのことだったので、12 月 31 日付けで第 1 回のレポートを送ってもらうことを指示するにとどめた。この指示は、実は、学生の実情に対する認識の甘さに起因しているものであったのだが（後述、第 3 節）、当初それには気づかなかった。

それはさておき、以下、具体的な活動報告をおこなっていきたい。「経験の蓄積」のために役立つはずである。

### A 君（『想像の共同体』）のケース

#### 活動報告

年が明けてもレポートが来ない。心配になって催促したところ、「うまくまとめられない」とのこと。そこで、1月最初の授業後に会って話をする事となった。

1月13日。その時点でA君はまだ、課題テキストを一度通読しただけであった。しかも本人の理解度は、キーワードを3つ選び要約し、自分なりの考察を与えるという期末レポートを書くにはまだ遠いものであった。この日は時間がないとのことだったので、興味のあるキーワード（「公定ナショナリズム」）を挙げてもらい、その概念が語られている章をもう一度読むように指示を出す。そして来週もう一度会うことを約束した。

1月21日。ロージナ茶房にてA君と読書会。彼の選んだキーワードが他の著者からの借用だったので、報告者は引用されている元文献（英語）をコピーし持参する。本当はA君と一緒に図書館に行き、文献の探し方を教えるべきだったかもしれないが、時間がないのでコピーだけを手渡す。

研究の世界に身をおいていると忘れがちだが、多くの学部生は欧文献のコピーの仕方を知らないものである。というのは、出版社や出版年度といった情報が、日本語文献とは違う位置にあるからである。また、引用に際しての文献の挙げ方も知らないひとが多い（筆名、イタリックの書名、出版場所、出版年度の順に列挙など）。このA君などは、Wordでの脚注のつけ方も知らなかった。

これらは初歩的だが、しかし誰かに教わらないとなかなか分からない事柄であろう。こういった諸々を教授できただけでも、RAの存在意義はあるように思えた。

この日はまた、歴史的な背景をふまえての本を読み方が焦点になった。受験で習った世界史の知識を使うだけでも『想像の共同体』は立体的に読めることが分かってくるにつれて、A君の目は輝きだした。報告者も、忘れていた学問の喜びのようなものを思い出し、逆にA君に勉強させてもらった気持ちでいっぱいになる。計4時間にわたる読書会だったが、実りの多いものだった。日曜日（1月23日）に第1回目のレポートを受け取る約束をし、A君と別れた。

1月27日。メ切から3日過ぎても、A君のレポートは届いていない。半ば諦めつつ催促のメールをすると、今夜中に送るとのこと。実際には、さらに遅れて30日にレポートをもらう。

2月3日。レポート提出期限2日前だが、もう一度会って、前回のレポート（報告者添削済み）について議論する。残り時間も限られているので、箇条書き風の論述の流れをよくするためのアドバイスを中心に行う。

2月5日、無事、レポート提出。

## 感想

A君とは昨年中もある程度のやりとりをメールでおこなっていたが、1月に入ってから集中的にサポートした。「古典を読むのは初めて」という学生であり、論理的な文章を書く能力も担当学生中もっとも低かったが、議論を重ねるにつれてぐんぐん成長していった。これは主観的な感想でしかないのだが、A君は典型的な「いまどきの学生」ではないかと思う。つまり、能力がないのではなく、能力の使い方を知らない学生であり、物事に興味がないのではなく、興味の対象を見つけられない学生である。

こういった「眠りこけた」学生を起こし、サポートすることに本プロジェクトは非常に有効である。以下のA君のアンケート回答は、本プロジェクトの成果を誰よりも雄弁に語っている。

「自分の読書が全く進んでいない状態でも、RAの方に会う価値はあると思います。読み方の切り口を聞くことで本の内容は入ってきやすくなりますし、なにより触発されるところが大きかったです。また論文の技術的な面を教わる機会はなかなかないので良かったです。

普段あまり勉強していない人は、RAの方と読書を進めていく中で、グンッとやる気が触発されるかもしれません。また熱心な人にとっては、いくらでも自分のやりたい勉強を進められ、RAに協力してもらうことができると思います。

いい意味で、それぞれのやる気次第で学べる授業スタイルだと思います。レポートはひとつの文献に絞れて、授業を受けないと書けない訳ではないですし、思想史の流れを覚えさせられる訳でもありません。

しかし、興味のあるところを深く掘り下げることができるので、大学らしくてすごくよかったですと思います。個人的にはもっと早めに読書を進めていれば、吸収できるものが大きかったなと少し悔やんでいます」

## B君（ヘーゲル『法の哲学』）のケース

### 活動報告

B君は、報告者のもっていた「忙しい」3人の学生の中では、もっともやる気のある学生「だった」。当初ルソーの『社会契約論』の読解を希望していたのだが、11月に一度会ったときにヘーゲル『法の哲学』に変更した。そのときも理由をきちんと説明してくれたし、年末までのレポートも（3、4日遅れたものの）きちんと出してくれた「はずだった」。

1月3日。B君からメールが届く。レポートが出来たので添付ファイルで送った、との旨。

ところが、添付ファイルがない。

添付し忘れていたのだろうと思い、返信するも返事がこない。何度催促しても返事がない。しっかりした学生「だった」はずのB君が、レポートも未提出のまま、突如音信不通になったのである。

2月4日。レポート締め切り前日。B君からのメール。

「1月の第1週から第2週にかけて私生活でトラブルがあったため、何度か打ち合わせをすっぴかき、その結果この授業の単位はあきらめて、本日までメールのチェックと返信を放棄していました。きちんとその旨をお知らせすべきでした。本当にすいませんでした。

返信が締め切り1日前となってしまいました。まだ間に合うでしょうか。

一応昨年末の段階で提出したつもりでいた（これに関してもすいませんでした。添付ミスでした。）要約があるのですが、枚数が足りてない上に第3部第2章「市民社会」の208節まで（欲求の体系まで）しかまとめられていません。

今日は2限と3限にテストがありますので、昼休みかその後ならばいつでも時間とれます。もしメールに気づいていただいてお時間あるようでしたらご連絡ください。このアドレス宛でのメールを携帯に転送するように設定しておきます。

多大なご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

（\*報告書にメール本文を転記するにあたっては、念のため本人の承諾を得ている。）

幸い、このメールを読んだのが午前中であったため、3限後に会うことにした。B君が添付してくれたレポートは、内容的にはきちんとまとまっていたため、やはり論旨の流れを整えるようなアドバイスをした。

2月5日。無事、レポート提出。

## 感想

B君のアンケート回答に「大学院生としての論文執筆経験を活かしたレポートの構成方法のご指導は、非常に説得力のあるわかりやすいものでした」と書かれているように、論理的思考のための「テクニック」もまた、学部生に指導すべき案件である。このことはA君の場合にも当てはまることであった。

個人的には、『法の哲学』の内容や思想的背景など、本来指導すべき方面で何もできなかったことが、悔やまれる。

## C君（ホブズ『リヴァイアサン』）のケース

### 活動報告

顔合わせで会って以来、音信不通であった。メールをしても返事がない。年末締め切りのレポート提出も、当然無視。担当した3人の学生のなかで、一番やる気のない生徒であった。

1月13日。授業でC君を発見する。報告者が送信していた一橋大学アドレスを、C君は使っていないらしい。しかし本人は自分から連絡先（通常使用アドレス）を教えるのを忘れていたことを認める。おまけに、まだ課題テキストを読んでいないとのこと。過ぎたことにはこだわらず、これからの方針を立てる。また、時間がないので連絡を携帯メールでおこなうことを取り決めた。

1月20日。C君は、約束していたはずのレポートを書いてこなかった。しかし読書は進んでいるので、『リヴァイアサン』の論点や期末レポートの方向性を話し合った。

しかし、就職活動などで1月の残りは会えないとのこと。期末レポート〆切直前の2月3日の2限後に会うことを決め、念のために「メシおごり」を約束する。

2月3日。2限後、メールをする。「レポートまだ書いてないのですけど平気ですか？」との返信。想定内の出来事だったので、ポジティブな返事をし、ロージナ茶房で会う。

C君はすでにキーワード3つ（期末レポートの要件）を決めており、議論はスムーズに進む。課題テキストが岩波文庫『リヴァイアサン』第2分冊のみだったので、キーワードに関連する重要箇所を、第1分冊、第3分冊からピックアップし、説明した。

2月4日夜。〆切前夜、無事レポート提出。なお、本報告書作成時点で、C君からのアンケートを回収できていない。

### 感想

授業にとりくむ態度、モチベーションの低さが目立つ学生だったが、『リヴァイアサン』の読み合わせなど、学問的な場に入ればきちんとこなせる学生でもあった。レポートも〆切前日に出してくれた上、クオリティも低くない。

やはりA君の場合もそうであったが、いまの学部生は能力があるにもかかわらず、「学問に触れる機会」が日常的に少ないのではなかろうか。そしてその結果、能力を伸ばしきれずに卒業していく学生が多い、というのが現状なのではなかろうか。

## 3 反省と改善案

さて、第2節冒頭で「学生の実情に対する認識の甘さ」と述べたが、報告者は学部3

年生を担当したのだが、彼らが置かれている状況とはどんなものであるのか。

まず、ほとんどの学生にあてはまるであろう事情が、「就職活動」である。会社説明会に訪れたり、エントリーシートを作成したりで、学問にうち込むに適した環境には彼らはいない。

次に、これは個人差があるであろうが、3年生の冬学期というのはサークル・部活が（4年生の引退に向けて）忙しくなる時期であるか、あるいは（代替わりしたばかりで）3年生が最上級生となり、組織の運営等々でやはり忙しくなる時期である。

もちろん、これらの事情によって勉強しないことが正当化されるわけではない。しかしながら、こうした環境にあって学問的にモノを考え、専門書を読むことの困難さも、汲み取られるべきである。報告者は以上のような事情を知らなかったため、「年末までにレポート提出」という課題を出したことによって、結果的に学生をサポートするというよりも、「年末までは勉強しなくてもよい」状況を作り出してしまったのである。

しかし他方で、「忙しい」と言われてしまうと強く出られないのも、RAの実情であろう。RAの課したレポート提出期限を守らない、メールの返信が極端に遅いといった学生の行動は、「成績をつける権限のない」RAに対してだからこそそだと考えられる。もっとも、そんなRAだからこそ、学生が心を開いてくれるのもまた、事実なのだが。

担当学生のやる気や要望、専門性にいかに対応すべきかは、マニュアル化不可能である。ケース・バイ・ケースでしか処置できない問題だと報告者は考える。

とはいえ、学生＝お客様で事が済むかといえばそうではなく、一定の仕方で学生のモチベーションや方向づけを統一することはできるだろう。それが以下指摘する3つの改善案である。

第一に、講義そのものの目的や学生に対する要望・課題を明確に打ち出すことである。前回の本講義（報告者は参加していない）の反省をふまえて、今年度は学生に対するハードルをぐっと下げたとのことであったが、やはりハードルは高めに設定すべきであるとの印象を、報告者は持った。

第二に、過去2回とも講義は講義、レポートはレポートという体裁をとってきたが、講義とレポート課題をもっとリンクさせるのも手である。B君は次のような感想を述べている。

（質問：今回の取り組み全体についての感想を述べてください。）

「各課題テキストについて講義の中でもっと具体的に触れてもらえると（何か所か引用して先生方の解釈を示す、など）、学生の読解作業の助けになっていいのではと思います。そうすれば、講義＝演習連結型の授業としてもうまく機能するのではないのでしょうか」

本授業では講義で扱わなかった古典文献もリストに入っていたが、講義で扱った文献・テーマを選んで RA と議論し、レポート作成させるのも適切である。授業の進め方については、今後さまざまな試行錯誤が進められて然るべきである。

第三に、学部 1・2 年生を中心的な対象にすべきである、との印象を報告者はつよく持っている。その理由は、[1] 上に述べたように、学部 3 年生は「多忙」である。4 年生は卒論執筆でなお忙しいからであり、[2] 第 2 節で報告したように、「もっと早く読んでおけばよかった」と考える 3 年生も多いであろうからである。また文献の調べ方、レポートの書き方（構成、注のつけ方などのテクニック）なども、1・2 年生のうちに教授されるのが望ましいであろう。

## 4 活動の小括

実際の活動を通じての報告者の結論は、[1] 受験勉強を突破して一橋大学に入る学生は、やはり能力が高いこと、[2] にもかかわらずその能力を活かしきれずに終わってしまう学生がおそらく多いであろうこと、[3] 本プロジェクトはそうした学生のサポートとして、最善であるかはわからないが非常に効果の高いものであること、の 3 点である。

この [2] [3] に関しては、わずか 3 例からこうした結論を導く暴論はわかっているが、わずか 3 例からでも確信できるほどに、報告者は強い印象を受けた。もっとも印象的だったのは、彼らの目の輝きである。分からないものが分かったとき、納得のいく説明が得られたとき、自分の頭のなかで論理がつながったとき、彼らの目は非常に輝いたのである。

そしてこうした「学問の喜び」に、飢えている学生も多いのではないかと B 君はアンケートに、次のように回答している。

「難解なテキストを読むのは、ほとんど初めてだったので、ひとつの箇所について 2、3 日通して考え、筋の通った解釈に結びつけるという訓練ができたのは喜ばしい経験でした。一方で、まとまった分量を読みこなすには時間が足りなかったことも事実です。今後もこうした類のテキストにチャレンジしていきたいですが、次は時間的な制限がない中で取り組んでみたいです」

（質問：今回のような、教官による講義と RA による論文指導を組み合わせた授業が来年度以降も開講されることを希望しますか？ 後輩に勧められるかどうか、という観点でお答えください。）

(B君の答え：希望する、その理由)

「難しい哲学書に一度はチャレンジしてみたいと思っている学生は割と多いように感じます。そうした学生のためにもRAの方たちによるサポートを受けながら難解なテキストに取り組む機会を提供し続けるべきだと思います」

A君、C君同様に、B君もまた、学部3年生にして「古典テキスト」初心者だったのである。これを個人あるいは「いまどきの学生」のせいにして、落胆しているようでは大学に未来はない。上の回答から透かし見えるように、学生たちの多くは難解なテキストに「一度はチャレンジしてみたい」と考えているかもしれないのだ。ただ彼らは、それらにアクセスできないのではないか。書物の存在を知らなかった、ということもあるかもしれない。手にとって1ページ読んで捨てる、といったこともあるかもしれない。同じテーマの書物を読みたいのだが探し方が分からない、といったこともあるかもしれない。

いまの学生たちを取りまく「知的環境」については、真剣に考えられていい時期に入ってきているように、報告者は考える（報告者も8年前、学部生のときにヘーゲル『精神現象学』を読んでいて、まわりから「化石」と揶揄されたことを、いまふと思い出した）。A君が報告者との議論を通じて「なにより触発されるところが大きかったです」と述べているように、「いまどきの学生」たちは知的刺激を受けることが少ないのではないか。

本プロジェクトのように、大学院生と学部生という、教授と学生よりは近いコミュニケーションによって、学部生の「知的環境」の実体を把握し、改善することができると報告者は考えている。本プロジェクトがより洗練され、拡大していくのを望んでいる。

---

小谷英生（こたに・ひでお）

社会学研究科博士後期課程2年

専門分野：思想史

論文「カントの平和論」（全国唯物論協会編『平和をつむぐ思想』、2008）など